

【令和3（2021）年度】浄土宗開宗850年慶讃事業
大本山増上寺所蔵三大蔵電子化公開に関するシンポジウム

講演②「法然上人と一切経」

令和3年11月29日（月）13：35～14：00 / オンライン（Zoom）

林田康順

【1】はじめに一本発表の視座—

（1）シンポジウム概要から

仏教文化史上に残る大事業、浄土宗開宗850年慶讃事業「大本山増上寺所蔵の高麗版大蔵経撮影ならびに三大蔵電子化公開」を知っていただくためのシンポジウムです。

法然上人が大蔵経を背景として善導大師の『観経疏』へと到達し浄土宗を開いたこと、さらに徳川家康公から寄進された物として増上寺が所蔵してきた三大蔵の仏教のおよび文化的意義の高さと、三大蔵の電子化という新時代への移行を通じた人文学や仏教文化の新たな時代の幕開けを感じていただきたいと存じます。

（2）天龍寺221世 桂洲道倫禅師（1714～1794）

たれかいう一枚の紙 なかにふくむ大蔵経

天外に出頭する者 はじめて知らん この語のかんばしきを

（「わずか一枚の紙に過ぎない！」などと誰が言えるものだろうか。

この一枚の紙の中に大蔵経の教えがことごとく込められているのである。

三界六道という迷いの世界から出離することができた者こそ、

はじめて「一枚起請文」の説示の香り高さを知ることができるのである。）

→大蔵経—「覚り」への道程、「よく生きる」ための道しるべ ⇔ 「一枚起請文」
法然上人にとって「大蔵経」とは？

【2】先行研究の整理とその周辺

（1）落合俊典先生「報恩蔵の一切経について」

（『日本仏教の形成と展開』法蔵館、2002年10月）

①『選択集』第十二章私積段「読誦大乘とは、分ちて二とす。一には読誦、二には大乘なり。（中略）大乘とは小乗を簡ぶ言なり。別に一切経を指すに非ず。通じて一切の諸大乘経を指す。謂く一切とは、仏意広く一代所説の諸大乘経を指す。而るに一代の所説において已結集の経有り、未結集の経有り。また已結集の経においてあるいは龍宮に隠れて人間に流布せざる経有り。あるいは天竺に留まって、いまだ漢地に来到せざる経有り。而るに今翻訳将来の経に就いてこれを論ぜば、『貞元入蔵録』の中に、始め『大般若経』六百巻より、『法常住経』に終るまで、顕密の大乘経すべて六百三十七部、二千八百八十三巻。皆すべからく読誦大乘の一句に摂すべし。西方を願う行者各その意樂に随って、あるいは法華を讀誦して以て往生の業と為し、あるいは華嚴を讀誦して以て往生の業と為し、あるいは

は遮那・教王および諸尊法等を受持読誦して以て往生の業と為す。あるいは般若方等および涅槃経等を解説し書写して以て往生の業と為す。これすなわち浄土宗の『観無量寿経』の意なり。」

→石井教道先生『選択集全講』「円照が貞元十五（799）年に選したもので三十巻ある。然るに同録第一九（正蔵五五ノ九〇七）に菩薩三蔵録に八百七部、二千九百七十八巻あるのを小別して七門に分けてある第一の菩薩契経蔵が今集の大乗経と云われるものに当るようであるが、現在のは六百八十一部、二千四百三巻となっている（正蔵五五ノ九一〇）。（聖護蔵のは、六百八十五部二千四百八十三巻とある）。続貞元釈教目録に依れば、可なり後から補修されているのであるから、或は補修されない別本を元祖は見られたのかも知れない。然し伝来の古い聖護蔵にも合わぬから、或は深励の言うように何れかの写誤かも知れぬ。」（558頁）

→落合先生『『選択集』の第十二章私釈段には、貞元入蔵録の大乗経の総数六三七部二八一三巻となっている。このなかの二八一三巻は二三一三巻の誤りであるが、興味深いことは貞元入蔵録の大乗經典の総数を挙げるとともに首の『大般若経』と尾の『法常住経』を明確に記述している点である。これは乙本系（筆者補一比叡山黒谷報恩蔵一切経、清水寺御経蔵、七寺貞元入蔵録ニ引用スル異本）であるが、甲本系には大乗経の尾に『法常住経』ではなく『慈仁問八十種好経』という經典が目されている。これは『法常住経』に一部一卷付加されたものである。『慈仁問八十種好経』は中国撰述の偽経である。」（170頁）

→国際仏教学大学院大学日本古写経研究所編『日本現存八種一切経対照目録（改訂版）』（令和3年3月）

大乗経	貞元録：0001	大般若波羅蜜多経	六百巻（1頁）～
	貞元録：0146	妙法蓮華経	八巻或七巻（52頁）～
	貞元録：0503	大毘盧遮那成仏神変加持経（大日経）	七巻（115頁）
	貞元録：0517	金剛頂瑜伽真実大教王経（金剛頂経）	三巻（118頁）～
	貞元録：0639	法常住経	一卷
	貞元録：0640	慈仁問八十種好経	一卷（136頁）

②『選択集』第十二章私釈段「問うて曰く、顕密旨異なり、何ぞ顕の中に密を撰するや。答えて曰く、これは顕密の旨を撰すと云うには非ず。『貞元の入蔵録』の中に同じくこれを編みて大乗経の限に入る。故に読誦大乘の一句に撰す。」

③『選択集』第十二章私釈段「問うて曰く、爾前の経の中に何ぞ法華を撰するや。答えて曰く、今言う所の撰とは権実偏円等の義を論ずるには非ず。読誦大乘の言、普く前後の大乗諸経に通ず。前とは『観経』已前の諸大乗経これなり。後とは王宮已後の諸大乗経これなり。ただ大乘と云って権実を選ぶこと無し。然ればすなわち正しく華嚴・方等・般若・法華・涅槃等の諸大乗経に当れり。」

→天台大師智顛—五時教判

- 華嚴時—『華嚴經』
- 鹿苑時—『阿含經』など
- 方等時—「浄土三部經」など
- 般若時—『般若經』
- 法華涅槃時—『法華經』『涅槃經』

→善導大師『観経疏』「上来、定散兩門の益（コ読誦大乘）を説くといえども、仏の本願に望むれば、意、衆生をして一向に専ら弥陀仏の名を称せしむるに在り。」

（2）澤田謙照先生「法然上人と一切経」（『浄土宗学研究』37、2011年3月）

①日蓮聖人『立正安国論』「又云く貞元入蔵録の中に始め大般若経六百卷より法常住経に終るまで顕密の大乗経総じて六百三十七部二千八百八十三卷なり、皆須く読誦大乘の一句に摂すべし、当に知るべし随他の前には暫く定散の門を開くと雖も随自の後には還て定散の門を閉ず、一たび開いて以後永く閉じざるは唯是れ念仏の一門なりと。」（正蔵 84, 205a）

「釈尊説法の内一代五時の間に先後を立てて権実を弁ず、而るに曇鸞・道綽・善導既に権に就いて実を忘れ先に依って後を捨つ未だ仏教の淵底を探らざる者なり、就中、法然は其の流を酌むと雖も其の源を知らず、所以は何ん大乘経の六百三十七部二千八百八十三卷並びに一切の諸仏菩薩及び諸の世天等を以て捨閉闕抛の字を置いて一切衆生の心を薄んず、是れ偏に私曲の詞を展べて全く仏経の説を見ず。」（正蔵 84, 205a～b）

→澤田先生「法然が用語として用いる「捨・閉・闕・抛」の語義も、一見、一切の經典に対する全否定に見えるが、そうではなく、凡夫としての〈我れ〉にとっては差し詰め不要・不用であることを意味し、それが、絶対的に価値が否定されているのではない。

筆者の稚拙な例をもってすれば、一薬品は特定の患者にとっては価値ある薬品であっても、一般、不特定の患者にはその薬品は害毒にもなりうる。であるからと言って、その一薬品は無価値として、消滅のために破棄されるべき物ではない。」（166頁）

→宗義各別（後述）

【3】法然上人と一切経

（1）法然上人による浄土立教開宗—一切経を抜き見給うこと五遍—

①『四十八卷伝』卷第六「上人、聖道諸宗の教門に明らかなりしかば、法相・三論の碩徳、面々にその義解を感じ、天台・華嚴の名匠、一々に彼の宏才を誉む。しかれども、なお出離の道に煩いて、身心安からず。順次解脱の要路を知らんために、一切経を抜き見給うこと五遍なり。一代の教跡につきて、情思惟し給うに、彼れも難く、これも難し。しかるに、恵心の『往生要集』、専ら善導和尚の釈義をもって指南とせり。これにつきて抜き見給うに、彼の釈には乱想の凡夫、称名の行によりて、順次に浄土に生ずべき旨を判じて、凡夫の出離を、容易く勧められたり。蔵経披覧の度に、これを窺うといえども、取り分き見給うこと三遍、遂に「一心に専ら弥陀の名号を念じ、行住坐臥に、時節の久近を問わず、念

念に捨てざるもの、是を正定の業と名付く。**彼の仏の願に順ずるが故に**」の文に至りて、末世の凡夫弥陀の名号を称せば、彼の仏の願に乗じて、確かに往生を得べかりけり、という理を思い定め給いぬ。これによりて、承安五（1175）年の春、生年四十三。立ちどころに余行を捨てて、一向に念仏に帰し給いにけり。」（聖典 6 卷 56 頁）

→聖光上人『徹選択集』「三学非器」（聖典 3・284）のご述懐

→「三学」以外の解脱の道を求める。

→「**一切経**」**五遍**（『琳阿本』『捨遺古徳伝絵』以降）

→『浄土初学抄』天台宗・法相宗の浄土教の解説＋華嚴・天台・三論・法相・地論・撰論
・大乘律・真言・成実・俱舎・四分律の各宗章疏の提示

→恵心僧都『往生要集』→**善導大師『往生礼讃』**（百即百生）

→承安 5（1175）年春、43 歳、『**観経疏**』「**順彼仏願故の文（仏辺）**」（都合 8 返）

→**浄土立教開宗一決定往生への回心＝阿弥陀仏実在の確信＝「浄土三部経」の真実**

※参考：前掲『日本現存八種一切経対照目録（改訂版）』 貞元録：1361

大乘経 大乘律 大乘論 小乗経 小乗律 小乗論 賢聖集 三階教典籍 不入蔵
蔵外 曇鸞大師『往生論註』
道綽禅師『安楽集』
善導大師『観経疏』『往生礼讃』『観念法門』『法事讃』『般舟讃』
懐感禅師『群疑論』

（2）法然上人による一切経の捉え方

－ 1 宗義各別－〇〇宗の一切経あり－

①『修学についての御物語』「**自他宗の学者、宗々所立の義を、各別にこころえずして、自宗の儀に違するをばみなひがごとと心えたるは、いわれなきことなり。宗々みなおのこのたつところの法門、各別なるうへは、諸宗の法門一同なるべからず、みな自宗の儀に違すべき條は、勿論なりと。**」（昭法全 486 頁）

②『十住心論について述べられける御詞』「おおよそ一宗の習い、**一代聖教**におきて浅深を判ずる、常のことなり。しかれば、**一切経**は、同じく釈迦一仏の所説なれども、宗々の所学に従いて、浅深・勝劣不同なれば、いずれの宗の**一切経**と言うべし。**天台宗の一切経あり。華嚴宗の一切経あり、乃至法相・三論にも、各々一切経有るべし。天台宗の一切経の中には、法華を優れたりとするが故に、爾前の諸経に相對して十勝を立てたり。華嚴宗の一切経には、華嚴をもって優れたり**とす。**三論には、諸大乘経頭道無異とはいへども、般若をもって至極とす。法相には、解深密経をもって真実とす。**かくのごとく各々所解不同なるを、抑えて宗々を十住心に当てて、浅深を定めらるる条、その謂無きことなり。」（昭法全 483 頁～ 485 頁）

③『選択集』第一章私釈段「私に云く、密に計れば、それ**立教の多少は宗に随って異なる**

り。且く有相宗のごときは、三時教を立てて一代の聖教を判ず。いわゆる有・空・中これなり。無相宗のごときは、二藏教を立てて以て一代の聖教を判ず。いわゆる菩薩藏・声聞藏これなり。華嚴宗のごときは、五教を立てて一切の仏教を撰す。いわゆる小乗教・始教・終教・頓教・円教これなり。法華宗のごときは、四教五味を立てて以て一切の仏教を撰す。四教とはいわゆる蔵・通・別・円これなり。五味とはいわゆる乳・酪・生・熟・醍醐これなり。真言宗のごときは、二教を立てて一切を撰す。いわゆる顕教・密教これなり。」

→宗派毎に「一切経」がある＝宗派毎に「一切経の捉え方（教判）」がある

- 天台宗、日蓮宗— 『法華経』
- 華嚴宗— 『華嚴宗』
- 三論宗— 『般若経』
- 法相宗— 『解深密経』
- 真言宗— 『大日経』『金剛頂経』
- 禅宗（臨済宗、曹洞宗）— 不立文字（『金剛般若経』）
- 律宗— 『四分律』 …

— 2 一切経の帰結— 釈迦一代の聖教を、みな浄土宗におさめ候—

①『東大寺十問答』「問う。釈迦一代の聖教を、みな浄土宗におさめ候か、又三部経にかぎり候か。答う。八宗九宗、みないずれをもわが宗の中に一代をおさめて、聖道浄土の二門とはわかたなり。聖道門に大小あり権実あり。浄土門に十方あり西方あり、西方門に雜行あり正行あり、正行に助行あり正定業あり、かくして聖道はかたし、浄土はやすしと釈しいるるなり。宗をたつるおもむきもしらぬものの、三部経にかぎるとはいうなり。」（昭法全 643 頁）

②『鎌倉の二位の禅尼へ進する御返事』「善導和尚は弥陀の化身にて、殊に一切衆生を哀れみたまいて、一切の聖教を勘えて専修念仏を勧めたまえるも広く一切衆生のためなり。方便の時節末法に当たりて、今の教これなり。されば無智の人のみに限らず。広く弥陀の本願を憑みて遍く善導の御心に随いて、念仏の入門を勧めそうらわんに、いかでか無智の人のみに限りて有智の人を隔てて往生せさせじとはしそうらわんや。もししからば弥陀の本願にも背き善導の御心にも契うべからず。」（昭法全 527 頁）

→拙稿「法然上人〈十住心論について述べられける御詞〉について」

（『三康文化研究所年報』 35、2004 年）

「法然上人は「仏説はどれも百点満点！」という一代聖經観、そして、それに基づいた一代仏教観を終生堅持され続けた。法然上人は、仏説である經典の優劣を自らつけることを決してされはしない。煩惱具足の凡夫にそんなことができようはずはなく、許されようはずもないからである。無論、そうした仏説に基づいて構築された各宗の教義に対しても、浅深・勝劣などつけられはしない。（cf: 宗論はどちらが負けても釈迦の恥）

唯一、法然上人が施された經典・教義の分判は道綽の『安樂集』に基づいた聖道門と浄土門の分別、つまり、この世で修行を積み悟りを開くことを主旨とする經典とそれに基づ

く教えか、それとも、まずは阿弥陀仏の極楽浄土に往生してそこで悟りを開くことを主旨とする經典とそれに基づく教えか、というものである。この教判は、私自身の実存の姿を問うものであって、聖道門も浄土門もいずれが勝れいずれが劣り、いずれが深くいずれが浅いなどといった性格のものではないのである。」

→『選択集』の撰述—選択本願念仏思想の構築による仏教の転換—

- 1 三仏同心に基づく選択本願念仏思想
- 2 念仏と諸行をめぐる勝劣・難易の二義
- 3 善導弥陀化身の確信に基づく偏依善導一師説

称名念仏の普遍性と絶対性の確立

→各宗派の教義を裏付けとする各種浄土教の世界観との決別

「浄土三部経」が描く世界観に基づく純粹浄土教教義の構築に成功

→宗の三義

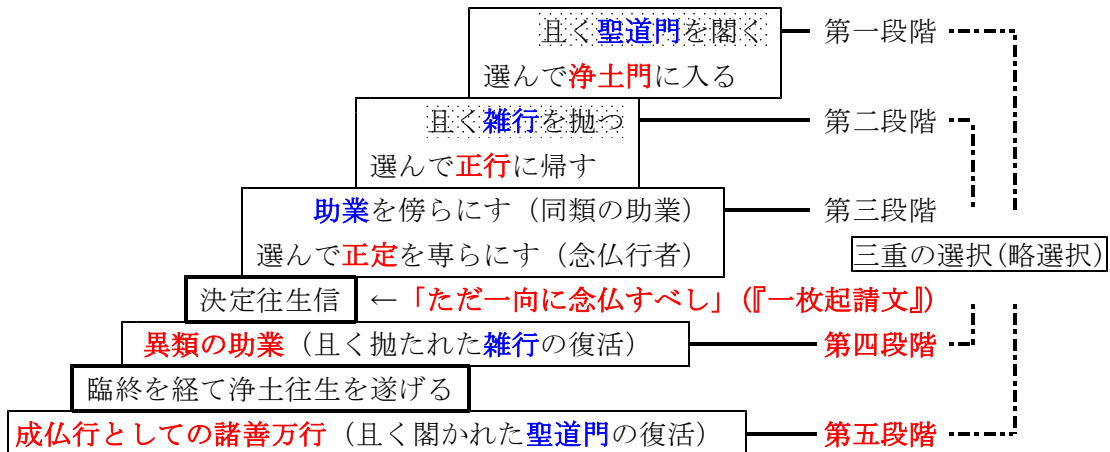
- 独尊—多くの教えの中で、自己にとって最高の教えである。
- 統摂—仏教の価値はその教えを中心に構成される。
- 帰趣—仏教の価値はその教えに帰一される。

【4】おわりに—法然上人にとっての「大蔵経」—

①『禅勝房に示されける御詞 其一』「唐土より日本へ渡しまいらせたる一切経は五千余巻あり。その中に往生極楽の為とて、双巻無量寿経・観無量寿経・小阿弥陀経、これを浄土の三部経と名づく。無量寿経には昔法蔵比丘と申しし入道、四十八願を発して極楽浄土を建立して、真実に往生せんと思ふ衆生を迎えおきて、遂には仏になさせ給うなり。仏に成らんと思わん人は、まず極楽を欣うべきなり。法蔵比丘、一切衆生を平等に往生せさせんりょうに、我仏に成りたらん時の名号を称念せさせんと云う願を發したまえる四十八願の中の第十八の願これなり。」(昭法全 696 頁)

→要偈—「究竟大乘浄土門 (大乘仏教の究極の教えは浄土門である) …
往生浄土見尊体 (極楽浄土に往生し、阿弥陀仏と相見える)」

②浄土宗における行の体系—五段階の進みと「大蔵経」—



③『十二問答』「問う、**余仏余経につきて、善根を修せん人に、結縁助成し候ことは、**雑行にてや候べき。答う、我がこころ弥陀仏の本願に乘じ、**決定往生**の信をとるうえには、**他の善根に結縁し助成せん事**、まったく**雑行**となるべからず。わが往生の**助業**となるべきなり。**他の善根を随喜讃嘆せよ**と釈したまえるをもて、心得べきなり。(昭法全 633 頁)

④『禅勝房伝説の詞』「現世をすぐべき様は、念仏の申されん様にすぐべし。念仏のさまたげになりぬべくば、なになりともよろずをいといすてて、これをとどむべし。(中略)**衣食住**の三は、念仏の**助業**なり。これすなわち自身安穩にして念仏往生をとげんがためには、**何事もみな念仏の助業**なり。」(昭法全 462 頁)

→念仏信仰の中、他の善根に結縁すること、生活のすべて(衣食住)が「助業」となる。

お念仏に帰結し、お念仏から展開する〈**結縁一行三昧**〉＝「**ただ一向に念仏すべし**」

→**第四段階 大蔵経〆異類の助業＝「よく生きる」ための道しるべ**

⑤『一期物語』「往生の為には称名足ると為し、若しは学問を好まんと欲するには如かず。一向に念仏して往生を遂ぐべし。**弥陀・観音・勢至に値い奉る時、何れの法門か達せざる。彼の国の莊嚴、昼夜朝暮に甚深の法を説く。その時の見仏聞法を期すべきなり。**念仏往生の旨を知らざるの程、之を学すべし。若し之を知らば、幾ならざる智慧を求めて、称名の暇を嫌わざるなり。」(昭法全 443 頁)

⑥『念仏大意』「末代ノ衆生、ソノ行成就シガタキニヨリテ、マツ弥陀ノ願力ニノリテ、念仏ノ往生ヲトゲテノチ、**浄土ニシテ阿弥陀如来・観音・勢至ニアヒタテマツリテ、モロモロノ聖教ヲモ学シ、サトリオモヒラクベキナリ。**」(昭法全 407 頁)

⑦『要義問答』「トクトク安楽ノ浄土ニ往生セサセオハシマシテ、**弥陀・観音ヲ師トシテ、法華ノ真如実相平等ノ妙理、般若ノ第一義空、真言ノ即身成仏、一切の聖教、ココロノマニサトラセオハシマスベシ。**」(昭法全 632 頁)

→拙稿「法然上人における成仏をめぐる一考察」(『宇高良哲先生古稀記念論文集 歴史と仏教』2021年11月)

このように法然上人は、浄土門が往生に留まるものではなく、彼土において成仏を遂げる教えであることを重ねて言及している。

以上の一連の法語から明らかなように、法然上人にとって末法の世に生きる私達に唯一残された成仏の道こそ彼土往生乃至成仏の教え、すなわち浄土門の教えであることは明らかである。

→**第五段階 大蔵経⇒成仏行の実践＝覚りへの道程←「ただ一向に念仏すべし」**

※七祖聖岡上人による二蔵二教二頓教判の構築＝一切経を視野にした教判の構築

→関東十八檀林における九部宗学―大蔵経(名目部・頌義部)⇒選択部⇒大蔵経(無部)

以上、ご清聴ありがとうございました。 合掌